様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　８ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ００７８４

研究課題名（和文）ユニバーサルファッション関する教材開発

研究課題名（英文）Development of teaching materials for universal fashion

研究代表者
夫馬　佳代子（FUMA, KAYOKO）

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：７０２４９２９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、体に問題を抱える人々の衣生活の実態調査を基に、それを解決する教材開発に取り組むことを目的とした。研究活動の成果は以下のようになる。
①2016年度は高齢者等が抱える衣生活の問題を実態調査（3年間）、②2017年度は高齢者等の聞き取り調査を基に衣服の考案・製作、③2018年度は考案した衣服の着心地や快適性と着脱動作の検証、④2019年度は衣服の考案に関する教材開発として副読本『知ろう・考えよう・作ってみよう ユニバーサルファッション』を作成。さらに冊子を用いた授業実践を実施し、中学生が提案するユニバーサルファッションを明らかにした。この研究成果は、学会発表及び研究紀要等に報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の研究成果の学術的意義については、次の2点があると考えている。第１は、従来ユニバーサルファッションに関する衣服や教材の開発は、研究者が主導で取り組んでいたが、本研究では当事者の立場で快適な衣服を共に考案し、この実践活動を中学校用教材冊子にまとめ、授業に活用した点である。第２は、中学の授業実践で、ユニバーサルファッションを考案する活動に取り組み、基礎技術を基に衣服を創造する成果を公開し、中学校家庭科における教材の可能性を提案した点である。社会的意義としては、本研究で実践したユニバーサルファッションの考案に中学生も参加したように、当事者と周囲の人々が共に問題解決に取り組む社会への提案である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop teaching materials to solve the problem based on a survey of the clothing life of people with physical problems. The results of research activities are as follows.
(1) Survey on the problems of clothing life of elderly people in 2016 (3 years), (2) Design and manufacture of clothing based on interviews with elderly people in 2017, and (3) Comfort and comfort of the designed clothing in 2018 And verification of putting on and taking off action, (4) In 2019, we created a supplementary book "Let's know, think, try to make universal fashion" as a teaching material development about the idea of clothes. Furthermore, we practiced lessons using booklets and clarified the universal fashion that junior high school students proposed. The results of this research were reported in conference presentations and research bulletins.

研究分野：家庭科教育

キーワード：ユニバーサルファッション　高齢者衣服　教材開発　授業実践　着脱動作　改良服　中学校家庭科　家庭科教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ユニバーサルデザイン及びユニバーサルファッションに関する研究は国内及び海外でも近年多く取り組まれ、日常生活を快適に向上させる商品も開発されている。また、高齢者や障害者の自立した生活を支援するための衣服も開発されてきている。しかし、従来の衣服開発は、開発者や介護者の視点からの開発が多くみられ、高齢者や障害者本人の視点からの提案は、まだ少ない傾向が見られる。

そこで、本研究では、高齢者の方の生活実態を捉え、高齢者の方が抱える衣生活の課題、特に生活の様々な場面から生じる問題に着目し、共同して衣服に対する要望･願いを具体的な形にし、実生活で着用後の着心地や機能性の検討や修正も共同で取り組むことを試みた。

また、現在、一般的に衣服の開発は被服の専門家及び企業が中心になり開発されているが、従来家庭の中で衣服が製作されていた良さも再評価したい。家族や近隣の高齢者の体の状況や生活状態を最も把握できるのは本人と家族である。高齢者衣服の開発に関し、家庭科における家族との交流や、基礎技術の応用・活用を総合した発展課題として、中学校段階の生徒が実感を伴い衣生活の問題解決に取り組むことにより、次世代の生活創造につながると考える。そこで、本研究は、高齢者衣服の開発に関する教材開発にも結び付ける。

具体的には、今後の家庭生活の中で、家庭科で学んだ基礎技術を生かして祖父・祖母のボタンなどの留め具を使い易く付け替える等、学んだ知識・技術で周りの人々の生活も快適に創造することができ、生活を創り出す自信に発展させることをねらいとした。

２．研究の目的

高齢化社会となり、高齢者用衣料に関しても既製品として多く取り扱われている。しかし、高齢になると体の不具合や体調により、自立して快適に衣服の着用が出来る条件は個人により異なるのが現状である。

本研究の目的は、高齢者衣料は、より個人の着易い衣服を開発する必要があり、この一つの取り組みとして、開発を企業に委ねるのみでなく、学校教育の中学校家庭科の教材として新たな衣服の考案及び簡単な改良方法の取り組みを試み、中学生による高齢者衣服の開発についての可能性を追究することにある。

具体的には、高齢者の実態調査に基づき衣服の抱える課題を明らかにし、家庭科の住生活分野の高齢者の模擬体験と同様、衣生活分野で扱われる「ユニバーサルデザイン」の課題を発展させ、高齢者の模擬着装体験を通して、中学生が習得した基礎技術を活用した、新たな高齢者衣服の開発に取り組むことを目的とした。

詳細な研究内容と目的は、以下のようになる。

本研究の最も独創的な点は、衣服開発の研究成果を教材化し、学校教育の中で中学生が衣服開発に取り組み、今後の衣生活創造の担い手として、高齢者衣服の開発を通して、独創的な衣服考案に取り組む点である。

そこで、衣服開発研究を教材化した、授業実践の構想と目的について、以下の４項目で具体的に述べる。

（１）高齢者の生活実態と衣生活の課題について実感を伴い伝える（生活観察と意見）

本研究では高齢者の生活実態（生活観察）と衣生活の課題（意見・要望から）を生徒に実感を伴い伝えることを目的に教材開発に取り組む。こうした考えを学習プリントに反映し、高齢者一人一人の現在の体が抱える現状と衣生活で抱える問題や願いを明確に示す学習プリントを作成する。この学習プリントを高齢者の聴き取り記事として教師が紹介し、個々の具体的な実生活の問題に取り組むという意識を育てる。

（２）高齢者が抱える衣生活の問題について実感を伴って考える（模擬体験）

高齢者の着脱における困難さについて、時間を伴い検討するために模擬体験を導入する。住生活では高齢者の視点で学校内を歩き、危険な箇所に気づくなどの模擬体験を生かした学習活動が積極的に導入されているが、衣生活における模擬体験の導入は少ない。

本研究教材では、軍手を両手にはめ、手指が自由に動かせない状態で、どの程度、既製服の着脱が可能であるかを体験する。手指を自由に使えることが当然であり、衣服の着脱を問題として認識したことが無い中学生が、手指の感覚が少し鈍るだけであっても日常の衣生活に多大な影響を与えることについて実感を伴い学ぶことを意図している。

（３）教師の取り組む姿勢を見せる（教師が考えた衣服改良）

教師が介護施設を訪問し、実際に高齢者と交流する姿勢を授業の中で紹介することにより、教師も教える立場のみでなく、生徒と同様に学び、チャレンジする姿勢で授業にのぞんでいることを強調することを目的とした。

家庭科における生活の創造は、実生活を観察し、実際の問題点に気づき、その問題を当事者とともに解決することであり、それが家庭科の根幹であることを、本教材を通して気づかせることを意図している。

教師の衣服改良への取り組みを、標本「改良服」として提示することにより、生徒の興味・関心を育てることも意図している。但し「標本」の存在が生徒の自由な発想に与える影響についても検討を加える。

（４）生徒の自由な発想を育てる（創造・創作）

生徒の学習活動としては、生徒各自が高齢者の衣生活の実態や要望を知り、さらに模擬体験を

通して高齢者の衣服着脱の困難さを実感した上で、各自が自分の発送でそれぞれの高齢者のための衣服の改良案を考案する。この段階では、まず自分の発想を形に転換できるよう、図で簡略に示せるように留意する。
（５）生活実態をふまえた問題解決学習への取り組み（問題解決）
　各自の発案をもとに、グループで検討を行う。高齢者の個々の体の状態や願いをもとに、どのように解決することが可能であるか、交流を繰り返す。この場合の留意点は、漠然と考えるのではなく、実際の高齢者の願いをどのように形にするか、既製服のどの部分を改良すると、要望に対応することができるのか。自分の技術で可能であるか、着用するとどのような状態になるか等、より具体的に確認しながら検討を重ねることを目的とした。

３．研究の方法
　本研究では、ユニバーサルデザイン教育に発展させる前段階として、高齢者の衣生活の実例を題材として問題解決に取り組むことが、ユニバーサルデザインを考案する授業にも発展できるものであると考える。
　そこで、研究方法としては、①高齢者介護施設において高齢者の衣服着脱の課題を観察、②高齢者の願い・要望をつかむ、③要望をもとに既製服を改良、④改良した衣服を高齢者の要望した方に着用し確認、⑤高齢者の衣服を考える授業の教材作成等の取り組む予定である。
　生徒が自分の生活や自分の周囲の生活を見つめ、実生活の中で問題解決に取り組める視点を育てることがユニバーサルデザイン教育につながると考えている。具体的な研究方法は以下に示す。
（１）高齢者の生活場面の観察・交流
　高齢者の着装上の困難な点を明らかにするため、高齢者施設における観察・調査に取り組む。具体的な手順としては、①聞き取り調査に使用するアンケートを作成、②高齢者施設を訪問し、高齢者と会話をしながら衣服についての聞き取り調査を行う、③調査から得た高齢者の意見・要望をもとに衣生活において早急に解決する課題を絞り込む。本研究では着装上の課題の中で特に「衣服の着脱時に抱える問題」に重点を置き、問題解決に取り組むこととする。
（２）各高齢者の体調と抱える衣生活の課題の追究
　聞き取りの予備調査の結果から、高齢者が抱える衣生活の問題として「着脱の際に留め具で困難が生じている」という意見が多くみられた。特に既製服に使用されるボタンは、高齢者にとっては【小さく扱いにくい留め具】であることが明らかとなった。そこで留め具が留められない場合の対応策を考案する。
（３）既製服からの改良（リフォーム）の提案【標本の作成】
　本研究では、まず既製服からのリフォームを提案する。具体的には、①高齢者の一人一人の体の状態に合わせて、既製服を改良することにより衣生活が変わる事を体験。②中学生の環境問題と関連してリフォームを実践的に学ぶ。③小・中学校段階で習得した基礎技術が生活で活用できる場面を体験。④既製服が着用できない人々もいることを認識する。⑤ユニバーサルデザインに考える契機とする。以上の５点が既製服を土台にリフォームに取り組むねらいである。
（４）高齢者の要望をもとにした衣服開発―衣服改良の提案と製作―【標本の作成】
　高齢者の要望をどのように「形」にするのか、衣服開発の研究成果を、教師が【標本】として提示し、生徒が具体的に衣服を改良することへのイメージがつかみやすいように留意する。
　以上のような方法で、研究に取り組むこととした。

４．研究成果
（１）2016 年度
　平成 28 年に実施した研究成果（具体的内容と意義）は以下のようになる。
１）高齢者の生活場面の観察・交流
　高齢者の着装上の困難な点を明らかにするため、高齢者施設における観察・調査を実施した。実施項目は①聞き取り調査に使用するアンケートを作成、②高齢者施設を訪問し、衣服についての聞き取り調査を実施し具体的な問題点を明らかし、③調査から得た高齢者の意見・要望をもとに衣生活において早急に解決する課題を絞り込み、今年度「衣服の着脱時に抱える問題」の問題解決に取り組んだ。
２）各高齢者の体調と抱える衣生活の課題の追究―聞き取りの予備調査の結果から、高齢者が抱える衣生活の問題として「着脱の際に留め具で困難が生じている」という意見が多くみられた。特に既製服に使用されるボタンは、高齢者にとっては【小さく扱いにくい留め具】であることが明らかとなった。そこで留め具が留められない場合の対応策を考案した。今年度は、掴みやすい形状のボタンの開発、暗がりでもボタンの認識ができる蓄光ボタンの考案、市販の磁石ボタンをさらに掴みやすくした磁石ボタン等の開発を試みた。
３）学校教育において既製服からの改良（リフォーム）の提案―高齢者の衣生活の実態調査をもとに問題解決を行い、学校教育を通して、既製服からのリフォームを提案する。具体的には、①高齢者の一人一人の体の状態に合わせて、既製服を改良することにより、衣生活が変わることを体験した。②中学生の環境問題と関連してリフォームを実践的に学ぶ事を試みた。③小・中学校段階で習得した基礎技術が生活で活用できる場面を体験した。④既製服が着用できない人々もいることを認識する学習を取り入れた。⑤中学校家庭科において、ユニバーサルデザインに考え

る場面を作り、副読本のテキストも考案し用いた。以上の 5 点について、中学校家庭科授業にユニバーサルデザインの授業を取り入れた。授業の成果については、次年度に報告する。

（２）2017 年度

平成 29 年度の研究成果について、研究目的及び研究計画と対比して記す。①本研究では高齢者の生活実態（生活観察）と衣生活の課題（意見・要望から）を生徒に実感を伴い伝えることを目的に教材開発に取り組むことを目的としたが、今年度は、高齢者の体が抱える現状と衣生活で抱える問題をもとに各種の衣服を考案し製作した。こうした考案服を教材として授業に生かす準備に取り組むことができた。②高齢者の着脱における困難さを、実感を伴い検討するために模擬体験を導入することを検討していたが、今年度は模擬体験で比較するための模擬体験用の衣服を開発した。さまざまな形態の衣服を模擬体験として着用することにより実感を伴い学ぶことを意図した。③介護施設を訪問し高齢者と交流する姿勢を授業の中で紹介し、教師の考案した衣服改良を標本として提示した。生徒の興味・関心を育てる効果を授業実践の中で検証した。④生徒の学習活動では、各自が高齢者の衣生活の実態や要望を知り模擬体験を通して高齢者の衣服着脱の困難さを実感した上で、自分の発想で高齢者のための衣服の改良案を考案した。⑤生活実態をふまえた問題解決学習への取り組み（問題解決）として、高齢者の個々の体の状態や願いをもとに、どのように解決することが可能であるか、交流を行った。高齢者の願いをどのように形にするか、既製服のどの部分を改良すると、要望に対応することができるのか。自分の技術で可能であるか、着用するとどのような状態になるか等、より具体的に確認しながら検討を重ね、考案服の提案を行った。さらに、今年度は考案した高齢者服について、実際に着脱が簡易であるかを検証した。衣服の着脱を撮影し、体の各部の動線を比較し、衣服形態により各部の動きが異なることを比較検討した。この動画を衣服考案のための教材として活用することを検討し、次年度の検討課題とした。

（３）2018 年度

平成 30 年度の研究結果について、研究目的及び研究計画と対比して記す。本研究の目的は、高齢者の生活実態（生活観察）と衣生活の課題について、生徒に実感を伴い伝えることができる教材開発に取り組むことを目的としている。昨年度までは、高齢者の体が抱える現状と衣生活で抱える問題をもとに各種の衣服を考案し製作したが、今年度は、製作した考案服を教材として授業に活用することができる冊子（副読本）『知ろう・考えよう・作ってみようユニバーサルファッション』と題する冊子を製作した。また、昨年まで高齢者の着脱における困難さを検討するために模擬体験を導入し、模擬体験で使用する体験用の衣服を開発、さらにこの開発した衣服の着脱を撮影し、体の各部の動線の分析をもとに衣服形態により各部の動きが異なることを比較検討したが、今年度は昨年に引き続き、この動画を衣服考案のための教材として活用し、検証結果を副読本に掲載した。副読本の写真や検証結果をもとに、生徒が衣服の着脱と衣服形態との関係について考察できるように配慮した。生徒の学習活動では、今年度は完成した副読本を活用し、昨年同様に高齢者の衣生活の実態や要望、衣服着脱の困難さを実感し、高齢者が自立し着用できる衣服の改良案を考案する学習活動に取り組んだ。

（４）2019 年度

令和元年度は、本研究課題の最終年度となるため、今まで取り組んだ研究成果のまとめとして、学会報告（ポスター発表）の準備・作成と研究成果報告書のパンフレット作成に取り組んだ。また、2018 年度に製作した冊子『知ろう・考えよう・作ってみようユニバーサルファッション』をテキストとして活用し、授業実践を行ったので、その副読本の授業効果についても検証を試みた。具体的には、本研究のこれまでの研究活動をまとめ、①高齢者が抱える衣生活の問題を訪問介護病院の協力で実態調査（3 年間）、②高齢者の実態調査結果及び聞き取り調査をもとにした高齢者衣服の考案・製作、③考案した高齢者衣服の着心地の快適性と着脱動作の簡易性の検証（着脱動作の動線を分析）、④高齢者衣服の考案に関する教材開発として副読本『知ろう・考えよう・作ってみようユニバーサルファッション』を作成、⑤作成した副読本を活用した授業実践、などの一連の研究成果について、再度検証し総括した。中学校における授業実践では、高齢者の手指が不自由な状態を疑似体験するため、手袋や補助具を付けた状態で衣服の着脱体験を行ない、高齢者衣服の課題に気づき、さらに体験をもとに、中学校までに習得した基礎技術を用いて、高齢者衣服を考案する授業実践に取り組み、中学校段階でも様々な視点で、高齢者衣服の考案が可能であることを明らかにした。こうした一連の授業実践に関する活動の成果は、研究紀要等に報告した。

上記の一連の研究成果については、学会報告及び研究紀要等において発表し、研究成果を公開した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 横山真智子・ 村井良妃・　夫馬佳代子	４．巻 ４３
２．論文標題 中学生を対象としたユニバーサルデザインの教材研究（１）ー教材用衣服の製作をもとにした補助教材冊子の作成	５．発行年 2018年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究紀要（教育実践研究・教師教育）	６．最初と最後の頁 107－１１６
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 0533-9529	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 夫馬佳代子・奥村若菜	４．巻 ２１
２．論文標題 介護を支援する衣服教材の開発	５．発行年 2018年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究・教師教育）	６．最初と最後の頁 79－88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 2432-6208	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考